2025.5.25.

「天地創造」

旧約　創世記　１章　１～２５節
新約　コロサイの信徒への手紙　１章１５～１７節

１．はじめに

5 月最後の主の日を迎えています。これから、毎月最後の主の日は、旧約から御言葉を受けていこうと思っています。

今朝与えられた旧約の御言葉は、創世記の第 1 章、聖書の最初のページ、天地創造の出来事が記されている所です。第 1 章には最初の六日間のことが記されています。神様は六日間で天と地の全てを造られました。そして、2 章の最初の所で七日目に安息なさった、つまり休まれたと告げられています。これが私共が用いている暦において、七日間が一巡りとなっている理由です。さて、今日は 1 章の 25 節までですので、26 節から始まります人間の創造については触れません。人間の創造について、また、何故天地が造られたのが七日間だったと記されているのか、それらについては次回、6 月の最後の主の日に御言葉を受けます。

２．カテゴリー・エラー

この創世記 1 章の天地創造の記事について、文字通り、六日間で神様は世界を造られたこと受け止め、この順番通りに世界は造られたと信じなければならないと考える人たちが居ます。しかし、私共はその様には考えません。それは、私共は日本基督教団信仰告白に言い表されておりますように、聖書を「神につき、救いにつきて、全き知識を与うる神の言葉」と信じているからです。それは聖書の告げる真理は「神様に関して、救いに関して」であって、聖書は科学（Science）の全き知識を与えるものとして信じているということではないからです。聖書を読めば、世界の構造も、原子や素粒子のことまで何でも分かる、そんなことはありません。聖書を読んでも、量子力学が分かるということはありません。ニュートン力学だって分からないでしょう。当たり前のことです。それは、聖書の告げる真理と、科学が究明している真理とでは、それぞれカテゴリー、範疇が違うからです。

私はこのことについて、よくこの喩えをします。詩人が雪を見て「天から白い綿が落ちてきてた。」と言うのを聞いて、気象学を修めた人が「それは間違っている。この現象は、空気中に含まれる水蒸気が-10 ℃以下になって、その時氷の核となる微粒子があると、そこを中心に水蒸気が付着して結晶が形成され、それが成長すると、次第に重くなり、やがて落下を始める。それが雪だ。白い綿

では無い。」と言ったとしたら、詩人は「はぁ？？？」と思い、同時に「この人、馬っ鹿じゃない」と思うでしょう。この創世記の 1 章の出来事が、その通り起きたと信じなければならないと考える人、或いはその正反対に、聖書はこんな荒唐無稽なことを言っているのだからとても信じられないと考える人、それはこの詩人と気象学者のすれ違いと同じ過ちを犯しています。ここで私共が受け止めなければならない聖書のメッセージはそんな事ではありません。聖書が告げる真理、信仰と救いについての真理、それは生半可な科学的な知識で簡単に葬ることが出来るような、つまらないものではありません。それは、私共の存在の意味、生きる目的にまで踏み込んでくる、実に壮大な、そして重大な事柄を私共に告げています。

３．神話？

さて、創世記 1 章～ 11 章までは神話ではないか。そう指摘する人がいます。私はそれを真っ向から否定するつもりはありません。創世記 1 章～ 11 章までに記されている天他創造、アダムとイブ、失楽園、カインとアベル、ノアの洪水、バベルの塔、これらは歴史的に実際にあったというよりも、神話として神様・世界・人間・罪・文明ということについて、それはどういうものなのかと告げている。その様に理解して良いと私は考えています。時々、ノアの洪水の時の船の痕跡がアララテ山で発見されたということがニュースになります。だいたい二十年に一度くらいの頻度で、このニュースが世界を駆け巡ります。しかし、それを確かめるために考古学者達が発掘に行って、ノアの方舟の遺跡であることが証明され、そこが世界遺産になったという話は聞いたことがありません。そもそも、この手のニュースには根本的な思い違いがあります。現在のトルコにあるアララテ山と呼ばれている山は、12 世紀以降にヨーロッパ人により「アララテ山」と命名されたのであって、この山がノアの時代からアララテ山と呼ばれていたことはありません。ですから、発見されたノアの方舟の残骸と言われるものは、はほぼほ間違いなくねつ造されたものです。

神話であるということは、その話の値打ちが無くなるとか、神の言葉として信じるに足るものではないということを意味するわけでは全くありません。この創世記の 1 ～ 11 章は、実に「神とは」「世界とは」「人間とは」「罪とは」「文明とは」といったことを、神話の形で私共に提示しています。ある人は、創世記の 11 章までを「原歴史」（ウァ ゲシヒテ）と言いました。全ての歴史がここから生まれてくる、全ての歴史の大本がここにあるという意味です。本当にそうだと私は思います。今朝与えられている所は、歴史世界なる前、この世界と神様との関係は根本的にどういうものなのか、それが示されています。

４．神様が天と地とその中にある全てを造られた

まず、聖書は「***始めに、神は天地を創造された。***」（1:1）と語り始めます。これが、聖書の最初

の一文です。聖書の話は、全てこの「*始めに、神は天地を創造された。*」の後に続きます。こう言っても良いでしょう。聖書の話は、全てこの「*始めに、神は天地を創造された。*」ということを前提として告げられている。神様が居るとか、居ないとか、そんな議論は聖書はしません。神様が天と地のすべてを造られた。神様とはそういうお方だ。これを受け入れなければ、この後の聖書の話はどれも受け入れられないし、何を告げているのか分からないし、聖書が語ることを正しく受け止めることは出来ない。そのように聖書は冒頭で宣言しているわけです。

5 月４日の礼拝において、ヨハネによる福音書１章１～５節の御言葉を受けました時、ヨハネによる福音書の冒頭の言葉、「*始めに言があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。この言葉は始めに神と共にあった。*」（ヨハネ 1:1~2）と告げられている「言」、ロゴスはキリストですと申しました。そして、ヨハネによる福音書は、この創世記の冒頭の言葉を意識して、それをなぞるようにして記したと申しました。実にこの「始め」というのは、天と地とが存在するその始めということです。現代人は、その初めとは「ビッグバン」のことであり、この最初の「光」こそ、ビックバンによって放たれた光だと言うかもしれません。しかし、そのように理解しようとしますと、先ほど申し上げました詩人と気象学者の間違い、カテゴリー・エラーを犯してしまいます。聖書は宇宙物理学の教科書ではありません。ただ天と地が存在するようになった「始め」の時、その時、父なる神様と子なるキリストと聖霊なる神様は互いに一つになって、この世界をお造りになったということです。この世界は、それこそ自然にこのように出来上がったのでは無くて、この世界を造られた方がおられる。そのお方こそ、神様なのだと聖書は告げているわけです。これが天地創造の話において、何より私共が真剣に受け止めなければならない、大切な点です。

５．古代の世界観の表れ

そして、その神様の創造は「言葉によって」為されたと聖書は告げます。人間が何かを造ろうとすれば、材料を集め、道具を使って造ります。それは、その材料の形を変えたり、性質を変えたりして新しいものにする訳ですが、神様は何の道具も使いませんし、何の材料も使いません。ただ「言葉」を使います。ただ、言葉だけで神様はこの世界を造られました。この神様の言葉、神のロゴス、それがキリストです。神様の言葉は、一度神様から発せられますと、それは出来事となります。私共の言葉は、口から出ると空間に拡散して、消えて無くなってしまいます。しかし、神様の言葉は違います。「*光りあれ*」と告げられると「*光があった*」のですし、「*水の中に大空あれ、水と水とを分けよ。*」と告げられますと、大空の上と下に水が分けられました。そして、「*天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。*」と告げられますと、「陸と海」が現れました。更に、「*地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。*」と告げられますと、「*地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木*

を芽生えさせた」のです。ここまでで 3 日です。そして、「*天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。 1:15 天の大空に光る物があって、地を照らせ。*」と告げられると、そのようになりました。4 日目です。大きな光ものとは「太陽」、小さな光るものとは「月」のことでしょう。ここで、少し注意深い方は、「あれ？太陽と月を造られたのは 4 日目だとぞ。とすると、一日、二日、三日と進む中で「**夕べがあり、朝があった。第一（第二、第三）の日である**」と告げられてきたけれど、この「夕べと朝」とは、太陽が沈んで夕となり、太陽が出て朝となるということではない？どういうこと？また、「光りあれ」と告げられて生まれた「光」は太陽の光ではないということになります。更に言えば、7 節の「*大空の下と大空の上に水を分けさせられた*」とは、どういうこと？と思われた方も居るでしょう。

ここには、古代のイスラエルの人たちが考えていた世界観が表れています。「*大空の下と大空の上に水を分けさせられた*」というのは、「大空の下の水」は海になります。一方「大空の上の水」というのは、大空の上に水があってそれが雨として落ちてくる。その雨が落ちてくるためのたくさんの穴が天上にあって、それが私共が考える夜空の星だと理解していたわけです。このような世界観を真実として受け入れる必要はありません。聖書は地球物理の本ではないからです。

６．神は言葉をもって造られた：秩序がある世界

ここで私共はもう一度、聖書は宇宙物理学、地球物理学の真理を告げているわげてはないということを思い起こさなければなりません。ここで大切なことは、神様は何度も「言葉をもって世界を造られた」ことを告げています。このことを私共はきちんと受け止めなければなりません。それは第一に、神様はこの世界を「秩序ある世界」を造られたということです。この世界は、何の法則もなく、目的も無く、偶然に消えては現れる「諸行無常の世界」ではないということです。太陽は毎日東から出て、西に沈みます。季節になれば雨が降ります。この世界は、実に見事に法則があり、秩序ある世界として存在しています。神様の御心に従って造られた世界には、まだ自分たちが知らない法則・秩序があるはずだ。そう考えたから、その法則・秩序を知ろうとして「科学」というものが「キリスト教社会」において発展しました。諸行無常の世界観の所に、科学的な探究心そのものが芽生えることは無かったでしょう。

更に言えば、この創世記の初めの部分のが記されたのは紀元前六世紀頃と考えられています。これは、バビロン捕囚によって、ユダ王国が滅ぼされ、バビロン捕囚という目に遭っていた時代ということです。神殿を失い、祖国を失い、異国に連れてこられたユダの人たち。その彼らに向かって告げられた告げられた「神様による世界創造の神話」。それがこの天地創造の物語でした。ユダの人たちが味わっていたのは、力だけがものを言い、小は大に飲み込まれ、明日への希望を失って、ただ巨大な波間に浮かぶ小舟のように、行く宛ても分からずに翻弄されていく弱小民族の悲哀でし

た。聖書はそのような神の民に向かって、違う。神様がこの世界を造られた。言葉をもって造られた。この世界の主は神様なのだ。バビロンなんかでは無い。そして、この世界は必ず秩序ある世界として立ち続けていく。だから大丈夫だ。あなたたちの存在が無意味になることなど無い。その神様のメッセージが、最初の「光りあれ」にハッキリ示されています。「***神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。***」（1:3）これは、この世界の中で光を見失いそうになっている人、生きる希望と勇気と力を失いそうになっている人々に対しての、神様からのメッセージ、神様からエールです。神様が最初に作られたのは「光」でした。この光が何を意味しているのか、昔から議論されていますけれど、定説はありません。ただ、私はこの「光」は、キリストの光、キリストによってもたらされる救いの光、福音の光、と理解して良いと考えています。

７．良しとされた

そしてもう一つ。この世界は神様の言葉によって造られた、つまり神様の意思、御心によって造られたわけです。そして、聖書は一日が終わる度に「***神はこれを見て、良しとされた。***」と繰り返しています。4 節、10 節、12 節、18 節、21 節、25 節つまり、この世界は神様の目から見て「良し」というものだということです。神様の目から見て「良し」と言うべきものだったということです。神様は三日目に植物を造られ、五日目に鳥と魚を造られ、六日目に動物を造られました。そして、一番最後に人間を造りました。人間は、植物が生長し実を付けることを知り、これを栽培して食べ物としました。また、動物を家畜として飼って、これを食べて生きることになりました。

神様が造られたこの世界にある物は、神様が「良し」と言われたものですから、神様から見れば出来損ないの物なんてありません。みんな良い物です。それは、神様が見て「良し」と言われるほどなんですから、それは本当に良く出来たものなんです。私共の体を見ても、本当に良く出来ています。人間だけではなく、虫も鳥も獣も、それぞれ独特な形状を持ち、機能を持った形をしています。虫や動物の好きな人は、それを話し始めたらどれだけでも話していられるほどでしょう。私は、昆虫や動物は苦手な方なので、あまりお話しすることはでは出来ませんけれど、神様が「良し」とされたのは、個々の被造物だけでは無くて、それぞれが関わったこの世界のシステム、生態系も実に良く出来ているということでしょう。現代は、地球の温暖化と言うことが言われ、これを押さえるために CO_2 の削減ということが言われます。私共人間は、神様が造られたこの自然の秩序について、それ程多くを知っているわけではありません。ですから、こっちを下げると思っても見なかった所が上がるというようなことが起きます。私共人間は、神様が「良し」と言われたものよりも、更に良いものを造ることなど出来るのだろうか。神様が「良し」とされた自然にを前にして、私共はもっと謙遜であることを求められているのだろうと思わされます。

８．自然は神では無い

神様が「良し」とされたのですから、自然は確かに素晴らしい。良く出来ているし、美しい。しかし、ここではっきりさせておかなければならないことがあります。それは、どんなに良く出来ており、素晴らしい物であったとしても、自然は神様ではないということです。神様に造られた被造物だということです。そのことをはっきり示しているのが、４日目に作られた「太陽」と「月」です。世界中にある自然宗教というものは、だいたい太陽か月を神様として崇めるものです。それには理由があります。太陽の運行、或いは月の満ち欠けによって、人間は暦を造りました。この創世記の１章が記された時、既に暦はありました。つまり、この時間というものが太陽や月の元にある、そう理解していたでしょう。或いは、もっと単純に太陽に光を受けて食べ物が育つということだったのかもしれません。太陽の恵みによって、植物も動物も生きている。だから、太陽を神様とする。そういうことでしょう。しかし、ここで聖書はっきりと、太陽も月も神様によって造られたと告げいます。つまり、太陽も月も神様ではないということです。太陽や月でさえも神様が造られたということは、どんな大きな山も、滝も、大木も、大きな岩も、みんな神様に造られた物だということです。自然界にある全てのもの、天と地にある全てのものは神様によって造られたものですから、それを神様として拝むことは出来ません。自然の大きさ、偉大さを知らされる時、私共はこの大自然を造られた神様は凄いと神様を賛美する。或いは、自然がもたらしてくれる恵に与る時、神様が自然を通して与えてくまださり、私を養ってくださる恵みに感謝して、神様を賛美する。自然を賛美するのではなく、神様を賛美する。それが、自然に対しての私共の相対し方というものなのでしょう。

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

天と地とその中にある全てのものを造られた全能の父なる神様。あなた様の御名を崇め、誉め讃えます。あなた様は、全てを御言葉によって造られ、全世界を秩序ある世界として造られました。あなた様だけが、ただ独りの神、世界の王、世界の主であられます。この世界がどのような混乱の渦に巻き込まれていこうとも、あなた様の造られたこの世界の秩序が破られることはありません。私共はそのことを信頼して、あなた様によって「良し」とされたこの世界の中にあって、あなた様からの恵みと真実とを受け取り、御名をほめたたえて為すべきことを為していくことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン